



解題

杖の乞

全



序



人おのゝ感ひあり感ふゝ師に
随もましく感ひある事終に
解るゝに僕情絶言へ志さして
より夙小夜に百練千練をまじと毎
そ落不致知くしを感ひたるも其
道く入るの極下まじくも夕可彦の
老師如小一様とよ給つゝ志さふも

賢愚得失の堺朦朧とくく猶
或のいね今や時勢うてい秋小窓の主人
我の随色ふり脚志ふて能意編語
心と詳く是る随仕とるに且少人
会意と納め夕多し物席をばとく
移く二十枚を信く茶海の一篇
邪正後言の論と均くふ知たり
い系きと品小座とさしと道く

不信の罪と思ふとて今日との時乃
連中校抄の巻く且支質の云捨きと
玉智の紙拾ひ集りく小冊をさく
いさく塔の師愚と謝とふ事
新書寛下文利自序

七月廿六日云尻

英風子の消息よきを

文利亭より

短評

葉の鳥のありて風の子引たり

行阿

麓をひくく尾の初智

文利

奥山のくらくき月小英亭より

英系

んおうぬもお入たるを

水

候別のかふき安と袖乃下

英風

帯状杖一今朝ハ早起

西巴

是くはくふまの湯の如穢

身門

五々路りしは何よりもの

系

寐く〜ぬとすもくハ先のゆま〜り立
六ヶ家多〜河多の〜も書
約束の花名ハ〜りや〜さ〜せ〜れて
朝り〜〜もゆら〜る〜子の陽さ〜
喜入のどれ〜姉〜姉〜
撥入〜場取る菓子〜の山並
晩鐘〜る〜〜見〜る〜内〜也〜
あち〜ら〜う〜も〜何〜と〜書〜中〜

水 利 巴 風 利 門 糸 巴

名〜〜〜記〜垂の石碑〜書〜して
夜〜の〜佛〜も〜あ〜ぬ〜も〜透〜る〜服
あ〜の〜の〜消〜す〜〜〜も〜寐〜る〜ま〜り
早〜よ〜吹〜也〜ら〜お〜ま〜り〜帷子
ゆ〜後〜ら〜新〜地〜の〜〜の〜不〜用〜心
出〜利〜生〜ら〜り〜け〜れ〜の〜柳〜社
咲〜花〜〜〜尾〜長〜櫻〜色〜興〜高〜雲〜首
柳〜〜〜〜〜山〜嶺

風 糸 水 巴 門 糸 巴

八月三日云流

新伝

竹河

様く小取整る名や角力仲

月ハ借く地小好る筆一 目 為水

且那一廣新酒樓塔小扇もきく 栞園

風く一障子のふもく例く 氏之

又是ハ山の音も時くくさぬ 善業

久しハ鳴りくく一掃きけ語立 又利

く 印新くくさく振身と名智く 英風

音いとふと親乃代くく 紫江

氣強軟のきくは極迫く 西巴

縁とくくあるも迫ひを月 園

此余強とくくと河と水一強 利

行くくの下結ハ強局く 風

善ねえーち紙打善のあつちころ 之

日和物さるる 舟乃道 本 也

小使も向いてけろ〜ぬ波の浦 水

ちきれく〜層ハりりり 江

月花の中もひきまけ殿乞ひ 利

毎かく陰もく〜いまふ 葉

ひ〜〜と猪も紙隠す〜長後屋 水

夢れろや〜あけろ〜わお節 利

筆の葉小遊〜む悠〜るの蝶 江

今由のふらり〜〜仕合 也

喰時の物さ〜くぬ〜〜け〜る 風

あろとせ層のそぬ〜ハ 葉

あつまのち〜あお何おもぢ〜りて 之

風のぬ〜〜〜〜〜雪の花 水

鏡持〜〜下りまけ笑ふ〜山鳥 葉

是ハ落〜〜〜の〜〜〜〜〜 風

晴々とくば月の又くまり
 響りくくも息はく
 草朽ふ新友殿を参りて
 比くくく服の十分
 けけくくくくくくく
 朝明りハくくく古寺
 多も来くくくくく
 連気如くくくく
 風 水 利 比 之 系 如 也

夜話

可東能延おつく連中壺觴と
 まうけて雨申とくくく
 さかきく変化自在くく
 何破くくく侍ふくく
 くくく人わり傷亡英風破る
 小や歌く感動くくく
 あくくくくくく
 三益法師ハ柳子ふくくく

合上似ひ扇をそくハ古今紙
熱慕ア〜や砂も笑ふる〜紙
〜紙〜紙〜紙〜紙〜紙〜紙
紙〜紙〜紙〜紙〜紙〜紙

竹河

玄川くま〜扇の風も秋を

英子燃る津

自尽環 至意下家抄

乙子

石川ふま〜扇の風も秋を

馬光

炎士

義ねぐ〜扇の〜又紙 全

本賦子亮

扇の〜〜扇の〜紙やせし 全

〜〜〜おえの〜

又もあし初草も春も春の月 する光
風小連のれくあくや燕の鳴る足 羨風

そはと師とを秋芽屋へ

折信でしし

蝶も袖川もくく花の空うらな 馬光
去の走らびうけりるあ仲し 又利

久里溪眺望

川おろす鑑山や 去りし雲 馬光
新燕くく山も春のちねうらな 病水

秋葉の京はあんと人くよひさ

きりれくくは溪上わらひあも

病水法師侍くく竹りくく

太二章と諸の御くく鑑山

病水山脈あくくおのくく春小

一白を責まの風流を尋ねるは作小

半そそりふりて一帯むらうら

とくとも移ゆらさる神初ま

只秋暮の景の一時を賦し

ふの名や終りもあつと秋のき

逢中一吟の句

ふくもやせら半や藤の初

懐旧

うらうらや藤の初〜の虫の初

催月辞

名月ハ文利言ハ高岸と後子事

近々の風去以振んとそ全を後し

長坂書其のねし〜さつはらり

事同し〜後よ清風の〜を思のお

さう〜し〜後お真あ〜とせは波

被る菟の子真も竹〜〜凡仲秋

整風を定らう〜は我千載の

竹阿

全

全

長崎小町へまわつてきませぬの逢合も
あつた不詮今宵多岐路を探らぬ
いと好むはあつたひそかにおのゝ
葉川とく四川の南わたり好む

浦

行跡

浦よりやううれおきせ玉乃月

心

名目しん八員員の逢日向 又利

舟

釣舟の釣るふいふ今月の月 書葉

里

あつたの灯りを流して里の月 松子

川

ふくの流る川よりよの月 栢園

橋

橋もよふ橋り初より橋の月 雨巴

答

岩角に後も松や岩の月 牙門か

野

海濱に松も花も山月 氏之

に

漏らぬの白き月乃も松 葉に

浪

誓の子と小舟拾りしも月 葉風

又通

老師と云松芦葺の山中に
俗よ志多ふ月二日暮水宿をして
小窓のえより花れあり彼法師
送別為別の吟あり夏よりしつ

山中より

天の川ちねを又嘆くは月 馬光

送別ありおのく一章あり

中ノイモの露の如くもあつふの月 練戸
ありや田毎をそよのとり着 新水

芦の湯連

雪のふかふかやりの月 波瀬
ありやささけもみれんの秋 洞帯
ありや光り織心ゆの後 赤糸
ありのさるや楊小波の花 英保

送北窓主人

歸武陵

英風

北窓道士乘秋風
柳標横擔向月中
莫訝婆娑不辭醉
白雲萬里隔西東

北窓今やぬけしやうきん
おのゝけと山具とてし
さく経吉下浦のまじりて
まじりて

今をきく一林川とくよ虫の如
 文利
 草の端の依やえく一培地なる
 言葉
 多難ふそぬぬあくるく一林の森
 松子
 若くもここちちら半の別道下
 梅圃
 浅之川ゆへ一秋の名始なる
 西巴
 茂層の葉子もあつと雪の向
 平之
 舞絃もあつと白く小菊の如
 紫江
 下り流と雲よりあつと林の雲
 牙門

苗別

古く一寛延二己の秋後初に四門
 ありと利きく一秋を感にえくすと
 ある一の心切あつて十日後の初にね
 ぬ葉の端にみよとの境をいふは清き
 の志きく一甚るあつて秋
 我常志の二三子とつとをいふを概ん
 ちりりしとれち中に平一り又
 乃秋神のまゝのうまきあつて

古白一読まのふくむる一と御の
 人く控境さうとやまら
 面ふ風ふと分るくむと
 折るあふとたれ文にとら
 のらしきまりのらむら
 すうしうらうと海金と
 部しやうと立知れ
 又とれとふくしきとの別

行 石

